

宮古・池間島のカツオ産業文化誌 (3) —ぎょしょく「魚飾」からみた島の村落組織と人間関係—

若林 良和 (愛媛大学副学長、南予水産研究センター教授)

川上 哲也 (池間文化協会会長、愛媛大学大学院連合農学研究科特定研究員)

1. はじめに

筆者らは、学際的な視点 (社会学、民俗学、地理学、歴史学など多面的なアプローチ) から、池間島のカツオ産業文化を総合的に究明している。まず、筆者らは、本紀要第23号において、島のカツオ産業 (カツオ漁業と鰹節製造業) を地域漁業史の視点から整理することとし、宮古地域の史資料をもとにカツオ産業の年譜を作成した上で、島の近現代産業史にみられる特性を把握した。さらに、本紀要第24号では、筆者らは、「魚職」の史的展開について先行研究をもとに再構成し、4つの事例 (鮫島幸兵衛とカツオ漁業、カツオ産業の展開過程、カツオ漁民の信仰、カツオと島生活) を取り上げて、島のカツオに関わる産業経済と生活文化の特性を明らかにした。

本稿はその続編で第3弾にあたる。島のカツオ産業文化に関して、今回は「魚飾」の史的展開を更に究明することにした。カツオ産業の展開過程について先行研究を踏まえて、島の村落組織や人間関係など伝統的な側面に焦点を当てて検討することが本稿の目的である。ここでは、まず、7つの「ぎょしょく」と「魚職」の意味を改めて概括した上で、既存文献とインタビュー記録をもとに、5つの事例をトピック的に取り上げて整理する。具体的には、カツオ産業を通じた島の共同性について3つの事例 (①コレラ流行の対策、②池前 (池間) 漁業組合、

③「池間民族」と愛唱歌) から、そして、海難事故とカツオ漁民の心性に関して2つの事例 (①カツオ漁船大本丸の遭難、②カツオ漁船雄山丸による中学生救助) から、それぞれ検討して、島のカツオに関わる産業経済と生活文化の特性について再検討しておきたい。¹⁾

2. ギョショク「魚飾」の意味

「ぎょしょく教育」は、筆者の若林が2005 (平成17) 年に提案した総合的な水産版食育である。これは食育基本法にもとづく食育推進と消費拡大のための魚食普及を統合した取り組みの試みと位置づけられる。²⁾ 「ぎょしょく教育」は地域特性を念頭に置いたフードシステムの検討であり、漁 (魚) と食の再接近のための新たなコンセプトといえる。

ひらがな表記で「ぎょしょく」とすることで、単に「魚食」だけでなく、魚の生産から加工、流通、販売、消費、文化まで多くの意味が含まれ、魚の諸事象をより精緻で体系的で、かつ、動態的に把握できる。7つの「ぎょしょく」は、第1に魚の調理実習や直接触れる体験学習の「魚触」、第2に魚の種類や栄養等の魚本来の情報に関する学習である「魚色」、魚の生産や流通の現場のうち、第3に漁船漁業を知る学習の「魚職」、第4に海面養殖業に関する学習である「魚殖」、第5に漁業者による植林活動など環境学習の「魚植」、第6に伝統的な魚文化

の学習である「魚飾」、第7に地域で水揚げされた魚の料理を試食する「魚食」をそれぞれ意味する。したがって、「ぎょしょく教育」は「魚触」から「魚飾」まで一連のプロセスを経て、「魚食」に到達する仕組みになっている。³⁾

「ぎょしょく教育」を実践することにより、地域の教育分野と産業分野に大きな効果が得られる。まず、教育分野では、地域の教育力を止揚し多面的な推進が可能になる。「ぎょしょく教育」は、地域活性化の基盤、地域の教育力を止揚する取り組みと位置付けられ、地域の社会関係そのものを豊かにして、「地域理解教育」として水産業と地域社会を紡ぐことができる。それから、産業分野では、水産振興に向けた多角的な展開が期待される。これは、地域活性化の基盤、地域の水産振興を推進する取り組みと位置付けられ、水産振興のツールとして、地域の産業経済を止揚させることができる。

したがって、7つの「ぎょしょく」をもとに、池間島のカツオ産業文化を検討することは、島そのものの理解の深化につながり、島活性化の推進を図っていく基盤となりうるのである。

3. カツオ漁業を通じた島の共同性

(1) 島ぐるみのコレラ対策

第一次世界大戦後、日本経済の好況に連動して、池間島でも鰹節の販売が大きく伸長し好景気の到来となった。島のカツオ漁業は沖縄県下で最も隆盛を誇っていた。当時、島では、カツオの話題で持ちきりで、親子でカツオ産業に従事していた家庭は収入も増えて羽振りが良くなったという。また、島の茅ぶき屋根の家屋が次々の立て替えられたほか、平良の料亭で漁民はビールで足を洗ったという逸話も残っている。

こうしたなかで、突如、1919(大正8)年10月、宮古地域一円でコレラが大流行した。それ

で、池間漁業組合の幹部が緊急の対策会議を開いたのに続いて、その夜のうちに島の字ウグナイ(総会)はミジュンマ(水浜)で招集の上、提灯の明かりのもとで協議されたのである。(森田(1961):105頁) その結果、①他村との交通を一切遮断すること、②できるだけ、定期運搬船の池間丸をピストン航行させて、宮古で食料品や生活用品を買い置きすることが決定された。それで、①に関連しては、島の許可なく、人の移動や物品の持ち込みができないように、漁業組合の組合員らは昼夜の区別なく交代で見張り員を置いて島の周囲を監視した。それで、島は外界から隔離されて孤立状態となったのである。狩俣から秘密裏に島に入ろうとする人がいれば追い返されたり、また、島外の弔事などに行きたいと申し出のあった島民は島で十分に吟味され、島外に行くとオハマダウ(大浜)に隔離小屋を建設し、約一週間、そこで寝泊まりさせたりした。(池間小学校(1963):35頁) そして、②に関しては、生活必需品が不足した際には、カツオ漁船は那覇へ買い出しにも出かけた。そのほか、古老がコレラ予防策で鍋の灰墨を体中に塗ることもあった。1年間の間、島民は忍耐強く協力し合って隔絶状態を継続したのである。(野口(1972):355頁)

このコレラは猛威をふるい、宮古地域全体で罹患2,000人あまり、死者約900人に達した。しかし、島はコレラ罹患者を1人も出さずに防御できたのである。(仲宗根(1988):83頁) これは、ブチュウツザ(村の指導者、首長)が島の緊急閉鎖と隔離という適切な措置をとるとともに、島ぐるみの絶大な協力によるものとされる。⁴⁾(川上(1997):42頁)

このように島が適切に対応できた理由や背景があったといえる。まず、明治末期から島民が一丸となってカツオ産業の発展に貢献したことで、島の経済力が高まって豊富な資金力が形成

されていた。それから、鰹節の取引先などの密接な人的ネットワークが構築され、島の社会基盤も備わっていた。その結果、島民の間で自主自立と相互扶助の精神が醸成されたことがあげられよう。

(2) 島の基盤組織としての池間（池前）漁業組合

池間島における漁業組合の組織化をみると、その設立は明治末期にさかのぼる。1902（明治35）年に漁業組合規則の省令が公布され、漁業組合は沖縄県にも適用されて県内各地に続々と設立された。島では、島周辺海域の専用漁業権を取得するために、池前漁業組合（任意団体）は、1904（明治37）年に設立され、そして、1907（明治40）年に法人格を持って組織強化を行ったのである。（野口（1972）：128頁） 1910（明治43）年9月に八重干瀬の慣行による専用漁業権が認可され、フディ（筆干瀬）は古来より島の重要な漁場となっていた。そして、同年11月20日の沖縄県からの設立認可により、池間漁業組合は誕生した。その後、専用漁業権の期間（20年間）満了の1930（昭和5）年には、地先水面専用漁業権の再更新が認可されると、慶祝の行事は島をあげて行われた。（大井（1984）：175頁）この専用漁業権の入漁料をめぐって、島は1935（昭和10）年に伊良部島の佐良浜（池間島の分



写真1 池間島沖でのカツオー一本釣り
（提供：池間島前里元長寿会）

村）と対立して紛糾し、流血事件にまで発展したのである。コレラ流行の際の対応と同様に、水浜の海岸で提灯のもとでムラウグナーイ（村総会）が開催されて打開策を協議した。（野口（1972）：354頁） 当時、280名に達した漁業組合の組合員は一致団結して果敢に取り組んだ。このような島の危機に際して、地域の精神的な結びつき、団結心は特筆すべきものであり、沖縄県下有数の漁業組合としての存在感を高めたわけである。（森田（1961）：119頁）

島の中央部にあったイーヌブー（入江）は島を二分するほど広大な面積があった。これを干拓して利便性を高める事業は、村会議員の仲間屋真、漁業組合長の仲間貞夫が中心となって1919（大正8）年から始まったのである。この事業では、島で中心的な役割を果たしていた漁業組合をはじめ、島民が総出で行われた。村ズンミ（吟味）で、島の家一戸につき男女1人ずつ出役することにして、島は大きな溝を拓いて南北をつないで神津原へ容易に往来できるようにした。当時、石などの運搬は、馬車も車もなく、人力で行われていた。（大井（1984）：117頁）

1960（昭和35）年代の池間漁業協同組合は組合員数500人あまりに及び、数多くの資産を有して隆盛を極めていた。当時の組合の主要事業には、次の8つである。①運送事業として、島と平良間の唯一の海上交通である池間丸を運営し、人や貨物、郵便物など様々な物品が輸送されていた。②水道事業では、1956（昭和31）年より簡易水道が島内の数カ所に設置されて運用した。③購買事業として、釣り竿などの漁具、漁船の燃料、一般資材など生産資材が取り扱われて販売も行っていった。④販売事業では、鮮魚の集荷入札が行われた。⑤船溜り利用事業として、池間漁港の管理運営を担った。⑥船揚場運営事業では、島のエンジン付き動力クリ船の約半数

が利用した船揚場を管理と運営を行っていた。

⑦ドック事業として、1958（昭和33）年琉球政府の援助により完成したドッグの管理運営が行われた。⑧育英助成事業では、学生への育英資金の支給、診療所に対する助成費の補助が進められた。（野口（1972）：136頁）

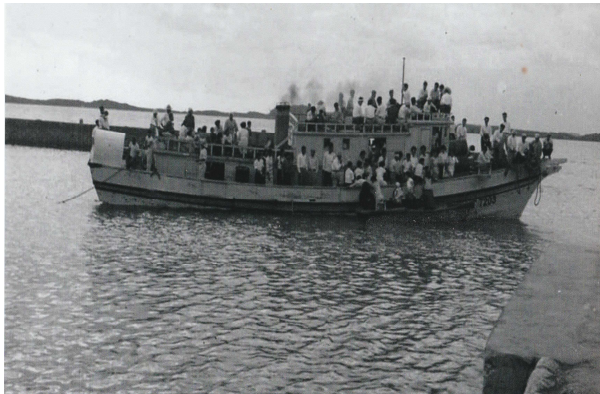


写真2 島民を運び続けた連絡船の池間丸
（撮影：嵩原忠太郎）

以上のことから、明治末期設立の池前（池間）漁業組合は、歴史的にみると、単なる漁民の生産組織であるだけでなく、島民全体の生活組織、さらには、精神的なつながりや心の拠りどころという島の基盤組織にもなっていたのである。

（3）「池間民族」と愛唱歌

池間や佐良浜、西原の出身者が集まれば、「池間民族」という言葉はよく聞かれる。これは池間島に出自を持つ人々の集団の意味である。「池間民族」と呼びうる根拠として、ナナムイ（オハルズ御嶽）への信仰、「海洋民族・漁撈民族」という自己意識、島最大の行事ミャークツツの3つがあげられる。（笠原（2008）：150頁）これら3地区の住民によって、1986（昭和61）年から「池間民族の集い」が毎年、秋に開催されている。同じ島言葉（スマウツ）で「バンティガ島はひとつ」という意識が強く、この会合は今も実施され、30年以上も続けられている。⁵⁾

戦前、島では、カツオ漁船のシンカ（乗組員）

がアダナス（タコノキ科のアダン、木根）も用いて、漁撈用のロープをつくった。乗組員は、冬の期間に自宅で縄の繕いをしており、春先に船主が素縄（直径1,5cm、長さ40m）を購入すると、ロープづくりを始めたのである。直径約3cmの穴を3ヶ所あけた板（幅約10cm、長さ約40cm）を材木に固定しただけの簡単なヤマ（縄なえ機）が水浜広場の東西に設置された。それに3本のハンドルを差し込んで手動で回転させてロープをつくる作業には、熟練の技術が不可欠であった。これは、時化の日などに行なわれ、見物人からのヤジもあって笑いと緊張が交錯し、春季の漁村風物詩となっていた。この作業は漁民の協働性や団結力を示すものであったが、1955（昭和30）年ごろになくなったという。（平良（2002）：72頁）

島民の愛唱歌としては、90年以上も歌い継がれる「池間行進曲」が代表的なものである。これは、島民にとって心の歌（シンボルソング）で、学校の運動会や島の各種行事でも歌われた。その歌詞は15節あり、カツオ産業に関するものは次の2節である。まず、「海に生まれて海に住む 我が同胞は祖先より 伝えし漁業を受け継いで かつお製造始めたり」とあり、漁撈民族性が明示されるとともに、地場産業としてのカツオ産業が明記されている。次に、「明治

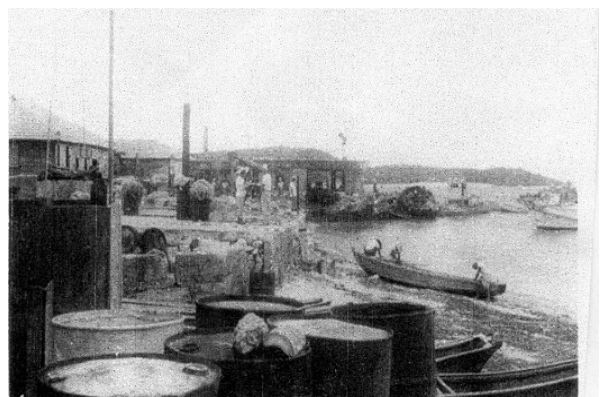


写真3 池間漁港と鯉節工場
（提供：池間島前里元長寿会）

39年初めて この業ひらけたり 組合数は6つあり 宝山、重宝、大宝丸、池島丸、宝泉丸、漁福丸は2号まで 北の浜辺を見下ろせば ここぞ名に負う仲間越 納屋の煙突空を突き 工場の機械は威勢よし」とあって、これを刻んだ歌碑が池間カツオ公園に建立された。ここでも、最盛期であった往時のカツオ産業に従事する島民のエネルギーが凝縮されている。

それから、南方のボルネオへ行った鯉節女工たちの口ずさんだ「沖縄女工の数え歌」がある。その歌詞は「一つとせ 人も知れたる南洋で三年経たなければ帰られぬ 四つとせ 夜の十二時頃に寝かされて 朝は五時三十分に起こされる 五つとせ いつも宿長さんが 見回りに来て肉詰めがヘタだと怒られる 九つとせ ここで私が死んだなら さぞやふた親嘆くでしょ 十とせ 十までつくったこの歌を 女工さん一同歌いましょう」とあり、これは南方における鯉節製造の実態とその過酷さを如実に語っている。(仲間 (2012) : 130 頁)

「海恵みネット」は地域ぐるみでカツオの価値を見直してカツオの消費拡大を目指して2012(平成24)年に設立されたグループである。それで、10年プロジェクトの一環として、宮古島市主催の「海の日 みなとフェスタ2013」において、愛唱歌「カツオ万歳」(作詞:伊良波盛男 作曲:仲間つなお)が披露された。その歌詞には、「カツオ万歳高らかに 島にとどろき胸躍り 海のマスラオイざ船出 カツオ豊漁 カツオ世 永久に花咲くカツオ世 歴史に映えて誇らしや 神の魚よ大親ガッチュ むかしもいまも守り神 カツオ万歳島栄え 子孫繁栄人栄え 進取の気性意気高し 世界に跳んでいそしんで カツオの歴史語り継ぐ 希望の明日に橋架けて 高く響動んで鐘が鳴る 声をそろえてさあ歌え カツオ万歳いつまでも カツオ万歳いつまでも」とあり、地域水産物としてのカ



写真4 池間漁港でのカツオ水揚げ

(撮影:山里勝助)

ツオがクローズアップされた内容になっている。

島民は歴史と文化に裏付けられた伝統の中に生きて池間民族としてのプライドを形成し、また、それが「池間行進曲」などの島の愛唱歌でも裏付けられた。それらの歌のなかで、カツオや鯉節は数多く取り入れられており、島を代表するシンボル、つまり、池間の地域資源として大きな役割を果たしていることが明白となった。

(4) カツオ産業と島生活

終戦後、池間漁港には、共同加工所をはじめ、約10カ所の鯉節製造工場が集中していた。ここでは、ドラム缶をつないで高く伸びた煙突から勢いよく煙が上がった。繁忙期の操業は池間島の男性だけでは間に合わず、隣村の狩俣や大神島、西原など島外の人たちが雇用され、その数が従業員の半数近くに達した。鯉節工場に通じる仲間越の狭い道路では、常時、多くの島民の往来で賑わい、大きな話し声や和やかな笑い声も溢れ、「カツオの島 池間島」として顔があったのである。(池間小学校(1963):47頁)島の若者は、出漁できない時、学校に集まって陸上やバレーボールに興じた。また、カツオ漁船が日没までに帰港すると、各船は各学校へカツオ1~2匹を届けた。他方、中学校では、3

年生の学校行事で、夏季休業中に男子がカツオ漁船、女子も鯉節工場で実技習得した。

終戦後における島の社会においても、カツオ産業を核とする生活が脈々と営まれていた。そして、島には、カツオを主人公とする地域文化が形成されて連綿と息づいているわけである。



写真5 鯉節工場内で処理されたカツオ
(提供：池間島前里元長寿会)

4. カツオ漁船の海難事故とカツオ漁民の心性

(1) 瑞光丸による大本丸乗組員の救出

池間島周辺、さらには、宮古周辺でも海難事故などが発生した。代表的なものとして、1950(昭和25)年6月に猛烈な台風の来襲で、カツオの盛漁期で出漁していたカツオ漁船の大本丸(木造船18トン)が沈没した。その乗組員全員が同僚船の瑞光丸に救出されたという劇的な出来事があった。同年6月23日、最大瞬間風速約70mの台風エルシーがヤビジ(八重干瀬)、狩俣、平良間に襲来した。その被害は死者行方不明者35人、負傷者39人、住宅の全壊1315軒、半壊1004軒に及び、農作物にも甚大な影響を受けた。

当時、厳しい海況であったことは他船の動静で裏付けられる。定期連絡船の池間丸は風雨が強まるなか出港したが、船長MT(明治42年生)の判断で水路のない荷川取下崎海岸の浜に乗り上げた。MT(大正11年生)は著しい視界不良に

陥って岬に座礁しそうになり、恐怖を感じたという。

遭難時の凄まじさは大本丸乗組員の体験談からも十二分にかがえる。Y.K.(明治40年生)によると、山のような大波をかぶると、大本丸は鋭利の刃物で切り落とすかのように沈没したようだ。それから、Y.S.(昭和2年生)は、遭難の際、ブリッジ(操舵室)で最後まで舵輪を握っていたが、漁船が猛烈な風と波で翻弄されて急に横転した。Y.S.は思わず、海中に飛び込んで浮上すると、漁船は急転覆のために復元してエンジンが起動したままだった。そこに、山のような大きなうねりで、船体が二つに折れて、トモ(船尾)側が見る見るうちに沈んだ。覚悟を決めてY.S.は、遺体だけでも発見してもらいたいと考え、1枚のタオルを引き裂いて伯父のY.K.(明治30年生)の手首と自分の手首をマストにくくりつけて、妻子を思い浮かべながら「健やかに育む子らに末永く幸多かれ」と詠んだところ、九死に一生を得て生還した。U.N.(昭和5年生)によると、荒れ狂う風と大波のなか、2時間あまり、それぞれ仲間が「ウマドー、オーイ、クマドー(私は、おーい、ここだよ)」と声を掛け合って、浮遊するブリッジやマストなどにつかまって助かった。K.M.(大正11年生)によると、水はけが悪かった漁船には海水がど



写真6 シンカ(漁船乗組員)による台風対策
(提供：池間島前里元長寿会)

んどん侵入してきたので、約100匹のカツオを並べられたナンファイ（海水よけ棚箱）を叩き割って難をのがれたという。元海軍兵のU.M.（大正9年生）は、以前の台風遭遇の経験を生かして、「頑張れば沈没しない」と励まし合って、機関室に入り込む海水をバケツリレーで汲み出した。海に放り出された最年少19歳のI.S.（昭和6年生）は、危険を感じて最初にダイバンジャウ（カツオ釣り竿）を束ねたものをウキ（浮き）代わりに浮遊していたが、その後、ドラム缶につかまり直して、島まで泳ぐことさえも覚悟した。彼は、上空で旋回している1羽のカモメを見て、「カモメよ。助け船に知らせてくれ」と祈っていると、風雨が静まりはじめ、カモメの飛び去る方向から瑞光丸が見えたので安堵したという。

風雨がおさまりつつあるなかで最初、人影も見られなかったが、瑞光丸は突然、大本丸の操舵室を見つけ出した後、次々と浮遊物を発見した。瑞光丸の乗組員が「彼らに乗せれば、本船が持たない」と叫んだが、船長のY.J.（明治38年生）は「発見したからには、みんな一緒だ。死ねばもろともだ」と救助の命令を下したのである。瑞光丸乗組員のN.S.（昭和6年生）によると、すぐさま本船に泳ぎついたのはS.Y.（昭和3年生）であり、続いて、ブリッジやマストにすがっていた乗組員たちも引き揚げられた。最後に、ダイバンジャウにつかまっていた年配のU.S.（大正11年生）が助け上げられて、大本丸乗組員全員の救助が完了した。そして、瑞光丸が池間漁港に帰港したのは黄昏時で、大本丸乗組員の家族や親族、友人知人、親戚など多くの島民が出迎えて喜び合った。

当時、科学的で詳細な海況情報があるわけもなく、空模様や雲の流れ、海の色、うねりの強さなどから長年の経験や勘をもとに台風襲来を予測する程度であり、漁民が自然に逆らえな

かったことを端的に示すものである。瑞光丸による大本丸乗組員全員の救出談からも、「板子一枚下は地獄」というカツオ漁船上の漁民生活は、自然に大きく左右される。したがって、漁民の心性として、自ずと、放縦的な一方で、強い結集力、緻密な相互支援という関係がみられるわけである。

（2）カツオ漁船雄山丸による中学生の救助

1）経過

カツオ漁船の海難事故のほか、カツオ漁船乗組員が海中転落した中学生を救助したこともあった。15歳の少年であった当山哲司（昭和27年生、石垣市立第2中学校3年生）は、沖縄県中体連テニス大会で主将として制覇し優勝旗を持って石垣島へ凱旋していた。1967（昭和42）年8月4日午前3時ごろ、彼は池間島沖で石垣島行の那覇丸から転落するという災難に見舞われた。彼は、暗い大海原で孤独と死の恐怖を感じながら、約8時間にわたって泳ぎ続けるなか、島のカツオ漁船雄山丸に救助されて「奇跡の生還」や「空前絶後の救出劇」とも称されたのである。⁶⁾

彼は沖縄本島の泊港から石垣島に向けて航行する那覇丸の甲板で寝入って、深夜に海中へ転落した。海面に浮き出て我にかえった彼は那覇丸の船尾を確認できたが、救助されることなく、どんとと那覇丸が遠ざかっていった。彼は、闇の中を照らす一筋の光（池間島の灯台）を目標にして、ひたすら泳いだ。そして、夜が明けると、彼はその目標を失って、立ち泳ぎをしたり浮かんだりして海面に頭だけを出す体勢をとりながら、延々と8時間にわたって漂流したのである。そして、午前11時、一旦、通り過ぎたよう見えた雄山丸はUターンして彼を救助した。⁷⁾ 引き上げられた彼は、九死に一生を得たと実感し、その感激を生涯忘れることはできなかった。第一発見者のI.S.（大正4年生）は、

最初、流木にカモメがとまっていると思ったが、不思議に思って改めて自ら双眼鏡を手にして確認した。すると、見たこともない大きな鳥だと思って、方向転換を指示して近づいてみると、彼であったと述懐した。雄山丸は、彼を注視しながら、直ちに助けると安堵感から沈んでしまうことがあるために3周してから引き上げた。M.H. (昭和26年生)は、救助において最悪の場合には飛び込むように船長から指示があり、命綱を腹にくくり付けてオモテ(舳先)で立っていたという。救助された彼は、気付けの往復ビンタ3発を受けて、湯に溶かした黒砂糖を少しずつ飲ませてもらい、両足をぬるま湯につけるなど入念に介護された。雄山丸は、彼が元気となり回復を確認して、そのまま漁を続行したところ、大きなカツオ群に遭遇して、当日約2千斤、翌日約1万斤を釣り上げて大漁になった。

8)

この救出談は地域のメディアでも大きく取り上げられた。翌日5日の地方紙では、多数の見出しが紙面も占め、「くたばってたまるか」「よくぞ頑張った」「スポーツマン根性 当山少年」「暗やみの海で7時間の死闘」「甲板から誤って転落」「宮古沖に県中校庭球で優勝の帰途」(琉球新報)、また、「当山君、奇跡的に助かる」「航行中海に転落 灯台たよりに8時間も泳ぎ続ける」(沖縄タイムス)と、それぞれ報じた。さらに、翌日の両紙においても、彼のサイン入り手記として、「死の恐怖と戦った7時間」「灯台の灯に勇気づく」「不安と疲れ 浮かぶ父母の顔」(琉球新報)、そして、「孤独の漂流8時間」「灯台の灯、頼りに 星明かりの海原を必死に泳ぐ」「幸運も見方、なかった死の恐怖と胸を絞る思い」など多くの見出しで続報が伝えられた。また、地域紙では、6日の南沖縄新聞が「哲司君の漂流記」と題して写真入りで掲載した。また、5日の八重山毎日新聞

も「当山君 航行中の船から転落」「8時間後、奇跡的に助かる」と報じ、翌日には「当山君大海の8時間」「昼は夜より不安だった」「飛び魚と海鳥で勇気 平、立ち泳ぎで体力維持」「救助後、宮古の琉球海運支店で元気を取り戻し5日の1便で帰った」と記載され、石垣空港で盛大な彼の出迎えがあったことも伝えられたのである。

他方、彼の実兄である当山訓生(昭和24年生、沖縄県立八重山高校3年生)は、夏休みで祖父母の手伝いで郷里の黒島に戻っていた。実兄は「その日の朝、電報配達人が真っ青な顔で電報を届けた。哲司が船から落ちて行方不明だと。祖母はもうダメだ。サメに食われると泣き叫んで座り込みました。そして、仏壇の先祖に手を合わせてお祈りをはじめた。祖父がサバニをチャーターして、私も一緒に石垣に向かいました。波しぶきをかぶって突っ走るシーンが脳裏に焼き付いています。とにかく、無事でいてくれ、何かの間違いであってくれと祈りました。石垣に着いてしばらくしたら、哲司が無事、池間沖で救出されたと連絡が入った」と述懐している。(南山舎(2009):18頁)

この救出談に関して、彼はメディアをはじめ社会から、強い精神力と冷静な行動力をもとに強い運と生命力を持ち合わせていると評されたほどである。⁹⁾

2) 展開

この救出から30年後の1997(平成9)年8月2日に池間文化協会が設立されたが、当山哲司はその記念講演会の招待を受けた。彼は池間島を訪問し、「奇跡の生還から30年目の夏」と題して講演したのである。当時、彼は沖縄県選出の衆議院議員上原康助氏の第一秘書を務め、沖縄県に関わる諸課題解決のために活躍していた。彼からの書簡(1997(平成9)年3月22日付)によれば、①この30年来、第一発見者の糸

満清吉をはじめ親泊船長ら雄山丸乗組員を命の恩人として片時も忘れたことはないこと、②こうした方々に直接、会い、これまでの非礼を詫び心からのお礼を申しあげたいこと、③糸満清吉の他界を聞き、自らの不義理と不甲斐なさを恥じて島への直接の訪問と御礼を申し上げたいことが、切々と記されていた。(川上(2007):105頁)



写真7 池間文化協会設立の記念講演会(当山哲司と雄山丸乗組員)

(撮影:川上哲也)

講演会の当日2日、池間島離島総合センターには、一目見たいと駆け付けた島民らが200名を超えるなか、彼は大歓迎された。講演を終えた彼が会場からの質問に答えているうちに、彼を池間島名誉島民にする提案もあって拍手喝采の場面もあった。(川上(2007):107頁) 続いて、彼を救助した雄山丸元乗組員10名が登壇した。舞台上で待つ彼が元乗組員一人ひとりと言葉を交わして握手したり、抱きついて涙ぐんだりしている光景を目の当たりにした聴衆から盛んな手拍子が送られ、会場は更に盛り上がったのである。大神島から駆け付けた元乗組員のT.S.(大正12年生)は「カツオドリが群れていて、カツオと思って行ったら当山くんだった。助けた後、なぜかそのまま漁に行った」と当時のエピソードを語った。O.S.(昭和4年生)は「大きな海鳥かと思えば、いや人間だ。そんな

ばかな。前のカツオ漁船が落としていったのか。人間だ。しかも、見たこともない少年だ。そして、本人も元気だ。漁に行こう」と話して会場を沸かせた。実際に、雄山丸は彼を乗せてカツオ群を追い続け、大漁をしたのである。それに対して、彼は「最初で最後のカツオ漁体験。そのカツオの刺身はとてもおいしかった。やっとお礼ができてほっとした。これから何度も池間島を訪ねたい」と語り、目頭を熱くした。会場では、涙ぐんですすり泣く声もれ聞こえ、異様な雰囲気にも包まれた。講演会に集まった島民は、30年という歳月の流れに感じざるを得ない映画やドラマのシーンのような感覚を受けながら、絶大な拍手を送ったわけである。¹⁰⁾

後日、彼から送られてきた書簡(1997(平成9)年11月6日)には、①今回は講演会という晴れ舞台で、命の恩人である雄山丸乗組員をはじめ島の皆さんに心からのお礼を述べる機会となり人生最良の日になったこと、②重い荷物をようやく肩からおろすことができ安堵した日になったこと、③雄山丸乗組員のユーモアと実直な思い出話も何物にも代え難い宝物となったこと、④島を第二の故郷とし、感謝の意を込めて、作家の澤地久枝の言葉を島に捧げることなど、感激と感謝の思いが綴られていた。¹¹⁾(川上(2007):108頁)

当時、彼の救出談は島にとどまらず、宮古・八重山地域、さらには沖縄県全域において大きな話題となり、カツオ漁船雄山丸乗組員が島の英雄的な扱いを受けたようだ。そして、その歴史的な出来事を回顧し、教訓として後世に伝承しようとする文化団体の取り組みは地域文化振興に資するものになったといえよう。

5. おわりに

本稿では、池間島のカツオ産業文化に関して、「魚職」の史的展開、つまり、カツオ産業(カ

ツオ漁業と鯉節製造業)の展開過程に着目して、既存の先行文献と生活記録をもとに、カツオに関わる産業経済と生活文化の特性について再検討した。それを踏まえた暫定的な総括としては、次の3点が整理できる。¹²⁾

第1に、カツオ産業を通じた島の共同性については、3つの事例から、以下のことが指摘できるだろう。明治末期の設立による池間漁業組合によって、カツオ産業は、島の基幹産業へと成長し、地域経済はもちろん、地域社会、地域文化など地域構造全体に大きな影響を与え、多様な形で寄与することになった。そして、池間漁業組合は漁民の生産組織を超えて島全体の方向性を主導する重要な基盤組織としての機能を発揮していたのである。さらに、漁民をはじめ島民全員はコレラ流行や度重なる海難事故などを克服するなかで「池間民族」としての一体的な共同性を醸成し、それらが「池間行進曲」など歌謡の世界で具現化されたわけである。

第2に、海難事故とカツオ漁民の心性に関しては、2つの事例によって、以下のことが把握できよう。カツオ漁船における海上生活構造は海洋環境に多大な影響を受けることから、漁民の間で育まれる精神的な世界が刹那的な側面を有する一方で、強固な団結力と相互扶助的な関係性が構築されている。また、漁民には人間の生命に対する尊厳や執着の念が存在するなかで、歴史的な海難救助を的確に伝承しようとする島民の思慕は看取に値するだろう。それを地域文化の振興に位置付けて展開することは歓迎されるべきである。今後、これらが学校教育やリカレント教育などの重要なコンテンツとして意味付けられることに期待したい。

第3に、宮古・池間の海は、かりゆしの海としてカツオの恩恵を付与してくれる反面、牙をむいて海難事故に及ぶこともある。海の利用をめぐる島特有の生活上の規範や心性には、先人

の築いた伝統や歴史が綿々と息づいている。それを継承することも、廃棄することも、島民の意志そのものが重要となる。生業としてのカツオ漁業、地場産業としてのカツオ産業が風前の灯火となった現在、島において新たな価値を地域ぐるみで共創するのは並大抵のことではない。しかし、これまでの遺産をプラス志向で地域資源としてチャレンジしていくべきであり、その萌芽的な取り組みが随所に見られることから、それを道標とすることで未来への展望は拓けていこう。

今回は点描的な検討の域を出ないが、筆者らは今後も池間島のカツオ産業文化を究明していく予定である。フィールドワークや文献の渉猟をもとに整理し、カツオ産業文化を学際的に検討した研究成果は本紀要などで続編を準備していきたい。

注

- 1) 本稿作成に関わる役割分担は、川上が各種の資料をもとに整理した上で、若林が本稿の目的や主旨に従って全面的に記述した。
- 2) 7つの「ぎょしょく」の内容と効果に関する詳細は、若林良和(2018)を参照されたい。
- 3) 「ぎょしょく教育」の実践は、新聞や雑誌、テレビ、ラジオなど多くのメディアで報道され、また、2度にわたって『水産白書』に紹介された。そして、「地域に根ざした食育コンクール」の優秀賞受賞、大日本水産会の魚食普及表彰など社会的な評価が高まった。
- 4) 池間島では、コレラは免れたものの、翌年にデング熱が流行して多くの犠牲者が出た。島では、悪疫から免れるために、サトウキビを焼いて食べさせて、滋養強壮に加えて、顎の鍛錬も行った。
- 5) 「池間民族」に関するイベントとして、2020(令和元)年3月に、文化庁の地域文化遺産総合活

用推進事業による「海洋池間民族 ～その個性と将来」と題したシンポジウム(宮古島市文化遺産活用実行委員会主催)が開催された。ここでは、池間民族の生活文化や将来について、3地区における言語や習俗の相違、池間民族の歴史やルーツを議論した。

- 6) 雄山丸は、これ以外に1952(昭和27)年にも沖縄本島の漁船乗組員6名を救助した経緯がある。
- 7) この救助に当たった雄山丸乗組員は、親泊源治、伊計正雄、前川義元、佐久本明長、友利貞夫、親泊繁、譜久村辰巳、狩俣秀雄、伊佐善昌、奥平洋三、伊佐喜作、糸満清吉、石原金十、高原朝光、川上芳克、山口良夫、前泊敏夫、与那原金十、川上金之蔵、伊計勝市、前泊重夫、親泊功、親泊亀、前川光、親泊勇助、前泊金太郎、下地源三の合計27名であった。
- 8) 筆者の川上は、当山の実父である当山哲男(当時は竹富町役場経済課長)から郵送されてきた、新聞の切り抜き、鉛筆書きの雄山丸乗組員名簿や島の概況メモなどを受理した。
- 9) 筆者の川上は、雄山丸乗組員であった実父の川上金之蔵から実話を聞くとともに、雄山丸で第一発見者のI.S.(大正4年生)と一緒に出漁し、発見現場となった洋上付近で当時の状況を詳細に聞いた経緯があった。
- 10) 2017(平成29)年に、池間文化協会設立20周年記念として、冊子『人間ドキュメント 一中学生が恐怖の漂流8時間一』が発行された。
- 11) 澤地の言葉は、当山の故郷である黒島を形容したもので、「この海は、人間の目が見たもっとも美しい海といわれるカリブ海よりも遥かに澄んで絶妙の色を呈している。神の領域にわけいったような海であり、空だった」という内容であった。
- 12) 筆者の川上は本稿に関連する内容を沖縄タイムスの連載「唐獅子」で言及している。具体的

には「史実の裏にカツオ漁」(2019(平成31)年2月6日)、「カツオ漁船瑞光丸と大本丸の物語」(2019(平成31)年3月30日)、「カツオ漁船雄山丸の伝説」(2019(令和元)年5月29日)である。さらに、川上は宮古毎日新聞「100年前のコレラ騒動 池間島は閉鎖で患者ゼロ」(2020(令和2)年4月9日)でも取りまとめている。

参考文献

- 池間小学校(1963)『池間小学校60周年記念』私家版(ガリ版)
- 伊良波盛男(2011)『わが池間島』池間郷土学研究所
- 伊良波彌(2013)『池間島からの視点～マーケット・カツオ漁業を中心に～』だしきや企画
- 上里武・本村満(2005)『島に生きて～奇跡をみた男たち～』私家版
- 大井浩太郎(1984)『池間嶋史誌』南西印刷
- 加藤久子(1987)「池間島の漁業と離島苦の女性労働」「地域と文化」第45号
- 笠原政治(2008)『池間民族考』風響社
- 川上哲也(1989)『仲原壮一郎と池間島』私家版
- 川上哲也(1997)『おかあ』私家版
- 川上哲也(2001)『んすむら』私家版
- 川上哲也(2003)『たまうつ先生』文芸社
- 川上哲也(2007)『カツオ万歳』沖縄自分史センター
- 川島秀一(2005)『カツオ漁』法政大学出版局
- 久貝克博(1998)『宮古回帰』印刷センターよなみね
- 砂川玄徳(1999)『宮古島人間風土記～終戦から復帰まで～』サン印刷
- 砂川玄徳(2002)『続・宮古島人間風土記』比嘉興文堂
- 平良新弘(2002)『海人の島』印刷センターよ

なみね

仲宗根将二 (1988) 『宮古風土記』 ひるぎ社

仲間井佐六 (2000) 『伊良部町漁業史～パヤオ
発祥の地～』 佐良浜印刷

仲間明典 (2012) 『佐良浜漁師達の南方鯉漁の
軌跡』 地域おこし研究社

2012 カツオフォーラム in 宮古島実行委員会

(2013) 『2012 カツオフォーラム in 宮古島 報
告書』 2012 カツオフォーラム in 宮古島委員会

南山舎 (2009) 『月刊やいま』 No. 187 (2009 年
1/2 合併号) 南山舎

森田真弘 (1961) 『仲間屋真小伝～池間漁業略
史～』 内外水産研究所

野口武徳 (1972) 『沖縄池間島民俗誌』 未来社

前泊徳正 (1975) 『前泊徳正ノート』 私家版

若林良和 (1991) 『カツオ一本釣り』 中央公論
社 (中公新書 1021)

若林良和 (2008) 『ぎょしょく教育 愛媛県愛
南町発水産版食育の実践と提言』 筑波書房

若林良和・川上哲也 (2019) 「宮古・池間島の
カツオ産業文化誌 (1) - 近現代における池間島
カツオ産業史の整理と検討 -」 『宮古島市総合博
物館紀要 23』

若林良和・川上哲也 (2020) 「宮古・池間島の
カツオ産業文化誌 (2) - ぎょしょく「魚職」か
らみた生活世界 -」 『宮古島市総合博物館紀要 24』

付記

本稿は、2018～2022 (平成 30～令和 4) 年度科
学研究費補助金「カツオを題材とした水産版食育
の実践的研究 - 「ぎょしょく」の体系化とツール
開発-」 (基盤研究 (C) 課題番号: 18K01996 研
究代表者: 若林良和) を活用した成果である。